

## 第 58 回日本母性衛生学会総会・学術集会

テーマ 予知予防と心の支え

大会長 山田 秀人  
(神戸大学大学院医学研究科産科婦人科学分野教授)

開催年月日 平成 29 年 10 月 6 日 (金) , 7 日 (土)

会場 神戸国際会議場、神戸国際展示場 2 号館

総参加人数 2,047 名

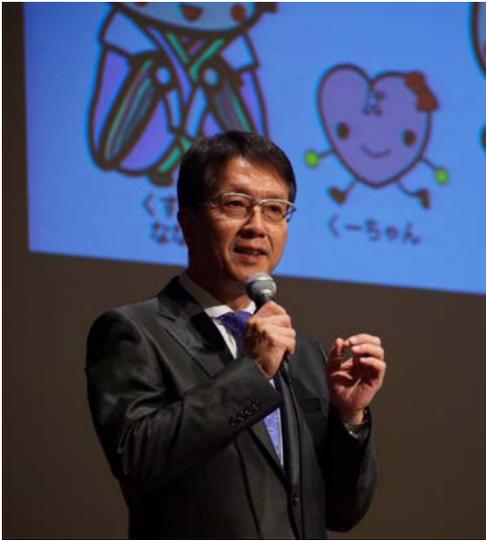


## 第 58 回日本母性衛生学会学術集会を終えて



このたび、第 58 回日本母性衛生学会総会・学術集会を平成 29 年 10 月 6 日 (金) と 7 日 (土) に、神戸国際会議場および神戸国際展示場 2 号館において、27 年ぶりに神戸大学産科婦人科学教室が主催いたしました。教室として、東條伸平教授が初めて第 10 回学術集

会を昭和 44 年 11 月に開催しました。教室からの発表は特別講演の「妊娠の成立」と他に「産褥の性機能」や「新生児奇形の実態調査」でありました。つぎに望月眞人教授は第 31 回学術集会を平成 2 年 10 月に開催し、会長講演「胎児と母体のコミュニケーション」、一般演題 290 題および出席者数 1800 余人をもって、見事盛会裡に学術集会を成功させました。



教室にとって 3 回目となる第 58 回学術集会のメインテーマは、「予知予防と心の支え」としました。いわゆる重症、難治性、治療抵抗性と表され、エビデンスのあるガイドライン的治療方法がない病気を考えてこのテーマを選びました。これまで私自身が関わった医療の中で、先天異常、不育症、母子感染、抗リン脂質抗体症候群など重症と言える妊娠の主治医を数多く経験してきました。その度に、こうなる前に「予知や予防」のカウンセリングや説明と検査、なってしまった後の「心の支え」がいかに大切かを痛感してきました。

1 年半以上前から兵庫県母性衛生学会会員からなる学術集会実行委員会を組織し、専門の意見を取り入れながらオール兵庫でプログラムを企画しました。招聘講演は同志社大学佐伯順子教授によります「近代化のなかの出産と女性—明治大正期のメディアにみる『母性』」、会長講演「母子感染を予防しよう」の他、5 つの教育講演および 7 つのシンポジウムにおいては、母子感染、不育症、性差、性的マイノリティ、虐待と暴力、障害と家族、メンタルヘルス、子育て支援などについて、疾患の理解と社会的現状および支援のあり方に焦点を当てながら、実行委員が心を込めてそれぞれのテーマを企画していただきました。



お陰様で、合計 2047 人のご参加をいただき、大過なくまた盛会裡に終えることができました。これもひとえにご支援とご指導いただきました日本母性衛生学会、兵庫県母性衛生学会の皆様ならびに招聘講演、6 つの教育講演、7 つシンポジウム、2 つの市民公開講座、J-CIMELS 実践講座、そして 526 題もの一般講演していただきました皆様をはじめとして、ご参加くださった沢山の方々のお陰であります。種を蒔き、育て、実りの多い学術集会となりますような企画の心算でした。

私自身、全ての会場に行くことは叶いませんでしたが、見学できた会場の中では「産科混合病棟」、「暴力の連鎖」のシンポジウム会場では人が溢れんばかりで熱気に包まれていて、大変嬉しく感動しました。各シンポジウム、市民公開講座および実践講座を企画ないし座長等を担当していただいた皆様から、後述の開催概要中にその雰囲気伝えてくれるコメントをいただきました。



本学会が手がかりとなって、各領域の幅広い問題に医療人のみならず報道と一般社会が

気づき、事が改善し発展する機会となって母性衛生学が未来益々発展する起点となりますれば幸甚の至りであります。皆様に、心より御礼申し上げます。

## 企画委員会名簿

太田 加代 (姫路赤十字病院師長)  
大橋 正伸 (兵庫県産科婦人科学会会長、なでしこレディースホスピタル院長)  
岡本 ゆり (兵庫県看護協会助産師職能委員長)  
小河原みゆき (一般社団法人兵庫県助産師会理事)  
工藤 美子 (兵庫県立大学看護学部母性看護学教授)  
斎藤いずみ (神戸大学大学院大学院保健学研究科教授)  
千場 直美 (神戸大学大学院大学院保健学研究科准教授)  
高田 昌代 (神戸市看護大学教授)  
田中 宏幸 (兵庫医科大学産科婦人科准教授)  
出口 雅士 (神戸大学大学院大学院医学研究科地域医療ネットワーク学分野特命教授)  
刀祢 幸代 (神戸大学医学部附属病院総合周産期母子医療センター産科副師長)  
中村 覚美 (神戸大学医学部附属病院総合周産期母子医療センター産科師長)  
新野 由子 (神戸大学大学院大学院保健学研究科准教授)  
野牧 弘子 (神戸大学医学部附属病院総合 11 階南病棟副師長)  
船越 徹 (兵庫県立こども病院産科部長)  
益子 和久 (神戸市産婦人科医会会長、益子産婦人科医院院長)  
松尾 博哉 (神戸大学大学院大学院保健学研究科教授)  
松下 清美 (兵庫県健康福祉部健康局健康増進課課長)  
三井由紀子 (神戸大学医学部附属病院総合周産期母子医療センター産科副師長)  
山崎 峰夫 (医療法人社団純心会パルモア病院院長)  
山下 直美 (神戸大学医学部附属病院総合周産期母子医療センター産科副師長)

## 開催概要

### 招請講演

佐伯 順子「近代化のなかの出産と女性－明治大正期のメディアにみる『母性』」  
(座長 池ノ上 克)

### 会長講演

山田 秀人「母子感染を予防しよう」(座長 高桑 好一)

### 教育講演

- 1 星 信彦「分子遺伝学が明かす男と女」(座長 山田 秀人)
- 2 中塚 幹也「性的マイノリティ (LGBT) の理解と支援」(座長 関 博之)
- 3 柴原 浩章「生殖医療におけるケアと倫理」(座長 北村 邦夫)

- 4 鈴木江三子「女子受刑者へのケアからみえる児童虐待の負の連鎖と、母子への支援」  
(座長 瓦林達比古)
- 5 蝦名 康彦「性分化疾患のケアと治療～ライフステージに寄り添いながら」  
(座長 下屋浩一郎)
- 6 高田 哲「障害のある子どもとその家族への支援」(座長 森 恵美)

## シンポジウム

- 1 「子育て女性のメンタルヘルスを守れ！」(座長 山崎 峰夫、石川 紀子)  
引地和歌子「東京都 23 区における妊産婦の自殺の実態」  
三品 浩基「神戸市の母子保健事業における母親のうつ傾向の評価の実情と課題」  
小澤 千恵「産後うつ病診断におけるエジンバラスコアの解釈、使用上の留意点・問題点」  
清野 仁美「妊産褥婦にみられる抑うつと不安への対応～精神科医の立場から」

本シンポジウムは、平日の午前中という時間帯でありながら、多くの聴衆が集まり、熱い関心が集中する中で進行しました。妊産婦メンタルヘルスの重要性は認識しているものの、日常の現場でどのようなサポートやケアを展開していくべきか、について多くの周産期医療者が疑問や戸惑いを感じています。その中で、各演者の講演は、参加者が問題解決にはまず何から始めるべきか、の糸口を見つけるために意義深い内容でした。(山崎 峰夫)

- 2 「不育症～体のケアと心のケア」(座長 杉浦 真弓、出口 雅士)  
高桑 好一「不育症の『支え』を考える～特に不育症と染色体の変化について」  
松本真理子「流産・死産における『喪失』とは何か」  
三木 有希「不育症とメンタルヘルス」  
出口 雅士「治療抵抗性、難治性の習慣流産に対する治療」  
片岡久美恵「不育症患者の支援～看護者の立場から」

今回のシンポジウムでは実際の不育症経験者を交えての他職種による治療、患者や家族の支援のあり方が議論された。日常の患者と家族の支援においては、個々の患者の悲嘆の過程やその感情の表出は個人によって大きく異なることから、医療者側が支援の方法やタイミングについて困難を感じることも多く、会場からも活発な質疑があった。そのなかで、不育症についての社会的啓発活動、長期的な悲嘆過程のサポートとしてのピア・カウンセリングや、出産しない生活のイメージも含む認知行動療法、そして必要なときに患者やその家族が不育症の医学的情報や支援に関わる情報にアクセスできるようにすることなど、その解決策の一端が垣間見えた。今回の議論がきっかけとして、不育症に対する社会の理解と、不育症患者とその家族に対する治療、支援のチーム医療が益々発展していくことを期待したい。(出口 雅士)

- 3 「暴力の連鎖を断ち切る～つながる、つなげる」(座長 大門美智子、藤井ひろみ)  
田口 奈緒「妊娠から見える女性への暴力」  
中板 育美「あたりまえに愛されたい～密室の中の子どもへの暴力」

森本志磨子「若年親の理解を深めてよりよい支援をするために

～しんどい家庭で育った若年妊婦を例に」

会場は参加者多数あり、途中退席も少なく、興味のあるテーマであったと思われる。3名のシンポジストの講演の後、総合討論を行った。質問がなかった場合の対応を苦慮していたが、会場からは活発な質疑があり安堵した。質疑応答を通して、それぞれに現場で活躍する経験豊かなシンポジストから、有意義な話が引き出され、日々の活動に役立つシンポジウムとなった。終了後も会場にて質疑が続いた事は言うまでもない。(大門美智子)

4 「産科混合病棟を多角的・総合的視野から検証する」(座長 齋藤いずみ、太田 加代)

福井トシ子「産科混合病棟から母子のための包括ケア病棟へ」

北島 博之「産科混合病棟の問題点～子どもの視点から」

齋藤いずみ「データで示す産科混合病棟(死亡と分娩の看護の重複)」

古宇田千恵「手の掛からない妊産婦の『心の摩耗』～産科混合病棟が母親に及ぼす影響」

朝9時開始前に会場は満席になりました。現在、病院における分娩は約8割が産科混合病棟で実施されるため、他科の患者と分娩進行者を、同時に看護する事態が生じています。助産師にとっても、看護管理者にとっても安全の担保と質の保証は、関心の高いテーマで、熱い討論が会場と繰り広げられました。本シンポジウムは、後日新聞に「広がる産科混合病棟」として掲載されました。2018年の複数の関連学会で「産科混合病棟」が取り上げられる契機となりました。(齋藤いずみ)

5 「在住外国人が安心して出産できるために ～その支援のあり方を考える～」

(座長 松尾 博哉、高田 昌代)

五十嵐ゆかり「ケアにおける多様性の視点を豊かにするために」

竹崎 裕子「当院での外国人妊産褥婦の支援の現状と課題について」

山下 正「在住外国人の産後保健サービス利用向上に資する方略」

村松 紀子「在住外国人の出産をみんなで支える

～医療通訳・外国人支援者との連携について」

東坂美穂子「神戸市における妊娠期からの支援」

神戸開港150周年、その記念すべき年に多くの外国人が暮らす神戸で本シンポジウム『在住外国人が安心して出産できるために～その支援のあり方を考える～』が企画されたことは大変意義深いと思います。会場には国際医療保健に取り組んでおられる大勢の多岐にわたる医療従事者が集まり、在住外国人の母子保健ではどのような格差が存在するのか、具体的な対応・工夫、実際の事例に基づいた支援等が活発に議論されました。本学会のテーマである“予知予防と心の支え”への答えとして、在住外国人が、安心して妊娠期を過ごし、主体的かつ満足な出産を経て、健全な産褥期を送るためには、また、私たちがその心の支えになるには何をなさねばならないのか、その方向性が共有できたと思います。(松尾博哉)

## 6 「TORCH 症候群 予防とカウンセリング」(座長 森岡 一朗、金子 政時)

古谷野 伸「TORCH 症候群の診断・治療・予防～小児科医の立場から」

渡邊 智美「当事者の視点で考える母子感染症予防啓発」

谷村 憲司「TORCH 症候群の予知、胎児治療と予防～産科医の立場から」

森岡 一朗「ここまできた、先天性感染児の診断と治療

～サイトメガロウイルスとトキソプラズマ」

万代ツルエ「母子感染の赤ちゃんと家族への関わり～臨床心理士の立場から」

TORCH 症候群は古くから知られている先天性感染症の代表的疾患である。これらの疾患は、医療の発展した現在においても「予防」することが最も重要である。本シンポジウムでは、この TORCH 症候群の予防とカウンセリングについて、各演者から最新のデータの発表がなされ、最終日の開催であったが活発に議論された。TORCH 症候群の予防法が共有され、明日からの診療にすぐに活かせる情報が得られた。また、妊婦の心を支えることの重要性や必要性が共有された。学会のテーマである“予知予防と心の支え”にふさわしい内容で、TORCH 症候群診療の実践に直結する有意義なシンポジウムであった。(森岡 一朗)

## 7 「子育て支援と産後ケア、地域連携『妊娠中から子育てまでの切れ目のない母子／家族への支援』」(座長 松下 清美、新野 由子)

四海 達也「ひょうごの子育て支援～『子育てするなら兵庫県』」

小谷真知子「当院における産後ケア～公立病院で始めた取り組みと課題」

正木 典子「妊娠中から子育てまでの切れ目のない支援～自治体でのとりくみ」

伊東 優子「『妊娠中から就学までの切れ目ない母子／家族への支援』

～わこう助産院、わこう産前・産後ケアセンターの取り組み」

安藤 哲也「イクボスが日本の子育てを変える

～産後・育児期における職場・上司の理解と支援」

会場は約 80%の人々が参加し、熱気にあふれていました。「妊娠・出産包括支援モデル事業」は「まち・ひと・しごと創生総合戦略」の中で、内閣府が打ち出した。2015 年から市町村事業として 5 年間の計画で、子育て世代の包括支援センター市町村事業を整備するという計画で進んでいます。5 名の演者の発表後に、質疑応答の時間を設け、フロアからも活発なやり取りが行えた。父親の子育てを推進する動きにも時代は確実に動いていると感じていただけたのではないのでしょうか(新野 由子)。

## 市民公開講座

### 1 「乳がん卵巣がん～その遺伝性と診断から予防・治療そして乳房を取り戻すまで」

(座長 澤井 英明、蝦名 康彦)

鹿嶋 見奈「乳がん卵巣がんと遺伝カウンセリング」

鏑本 浩志「卵巣がんの診断と治療そして卵巣の予防的切除」

高尾信太郎「乳がん～早くみつけて治すためには」

矢野 健二「乳房再建～乳房を再び取り戻す」

市民公開講座「乳がん卵巣がん～その遺伝性と診断から予防・治療そして乳房を取り戻すまで」

すまで」は、学会1日目の午後に、国際会議場メインホールで行われました。鹿嶋見奈さんは、遺伝カウンセラーの立場で、遺伝性乳がん卵巣がん症候群（HBOC）について、HBOC患者が直面する問題について、そして認定遺伝カウンセラーの活動の実際について話されました。鏝本浩志先生は、卵巣癌の診断治療についての最新情報をわかりやすく説明し、また兵庫医大での家族性腫瘍へのとりくみについて講演されました。高尾信太郎先生は、乳癌のリスク因子、一次予防、検診、早期発見で予後改善と乳房温存療法が可能となることを話し、最後にも検診の重要性について強調されていました。矢野健二先生は、大きな組織欠損を伴う時代の乳がん手術から、整容性を重視した温存手術への歴史を示されました。そして、術後の乳房再建法の最新技術について詳しく話されました。会場から、適正な乳がん検診の方法や間隔についての質問がありました。（蝦名 康彦）

## 2 沢松奈生子「ウィンブルドンの風に誘われて

～世界を転戦するために必要なフィジカルとメンタル」（座長 正岡 直樹）

まず、沢松様手作りというDVDで、これまでのご経歴を紹介した後、万雷の拍手をもって登壇されました。ご自身の妊娠体験から母性衛生の重要性をお話いただき、次いで現在までの選手生活から得られ貴重なお話をされました。「スランプになったら考えている事をノートに記録して、答えは自分で見つける」、「夢と（手の届く）目標は別に持つ」など私たちのこれからの生活にとって示唆に富むご講演でした。

## 実践講座

「J-CIMEL 公認母体救命ベーシックコース」（担当 森實真由美）

北海道から沖縄まで、全国から多数ご応募いただき、ありがとうございました。2日間で合計72名の方に受講していただきました。今回は全国ではじめて理学療法士の方がベーシックコースを受講されました。その施設では、長期安静後のリハビリだけでなく、授乳姿勢など、理学療法士さんが産後の方に積極的に関わっておられるそうです。もし妊産婦に何か起こったら、急変にきちんと気づき、初期対応ができるように、医師、助産師だけでなく色々な職種の方が妊産婦のことを気にかけてくださっているのがよくわかりました。最後になりましたが、ご協力いただきました講師の皆様に感謝申し上げます。（森實真由美）